

特集：内科100年のあゆみ（腎臓）

## Editorial 温故知新

黒川 清

### 1. 国際化の 21 世紀の日本

最近の日本はなにかと元気がないが、研究分野では若手の活躍もあり将来が愉しみである。とは言っても問題も多い。多くの現在のリーダーはかれらのキャリアのいつか米国で学ぶ機会を与えられを受け、現在への発展へ尽くしたと言えよう。しかし、もっと不便であった徳川、明治の時代、いやそれ以前から人間は知的好奇心に満ち、病気を知り、人体と生命の神秘と秘密を知ろうとしていた。これが 20 世紀の科学と医学の大爆発をもたらしたのである。今の日本は明治維新直前の徳川幕府に似ている。戦後の日本の経済成長は冷戦、日米安保下での護送船団、「政産官の鉄のトライアングル」での成長であり、決して自立した、開かれた競争で成長したわけではなかった。だからこそ、今になって役人の汚職、政治の貧困、大企業幹部（外務省、多くの政治家、雪印、みずほ銀行等々）の無責任、無能力を如実に示すスキャンダルが続出するのである。明治維新前後の日本はまさに国際社会に巻き込まれ、植民地になるかいなかの瀬戸際にあった。だからこそ、司馬遼太郎の描くような多くの傑出したリーダーが出たのであろう。今の日本にはそのような世界観を持ち、高い理想と志（こころざし）を持つリーダーがいるとは思えない。

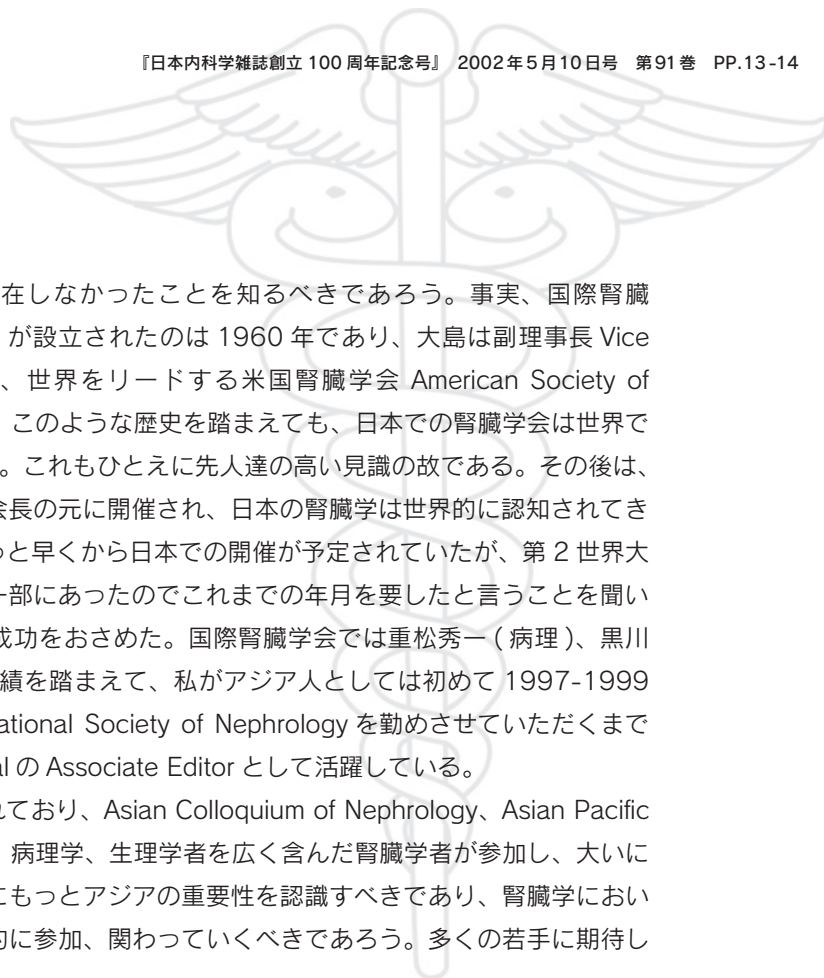
### 2. 腎臓学のあけぼの

医学ではどうか、腎臓ではどうか、近代医学が少しずつはいつて来た頃、西洋医学の合理性に目覚めた、好奇心旺盛な若者達が大勢いた。伏家素狄（ふせや いてき）もそのような一人であった。墨汁注入によって糸球体のろ過を証明し、1842 年の Bowman の糸球体のろ過説に先立つこと約 40 年の 1805 年に発表している。腎臓は「血液をろ過し分け、尿をつくる臓器である」事を力説した。良く知られた北里柴三郎も 100 年以上も前に活躍しており、1901 年の第一回 Nobel 医学生理学賞は Behring が単独受賞しているが、北里の業績も後に評価されている。

腎臓病については本特集で長沢俊彦が述べているように、1913 年、第一回日本内科学会雑誌、第一巻の 122 ページに佐々木隆興が「腎臓炎」について欧米に先駆け洞察力鋭い論文を発表している。その後の、1934 年の「馬杉」腎炎、山田英智による「mesangium 細胞」の存在の指摘等の世界の先駆的業績がある。歴史を知ることは、将来への展望を考察する上で、極めて重要である。これが無いから、政治も経済も行きずまっているように見えるのである。歴史的考察と世界的視野のないリーダーを抱く国は危うい。どの分野にも言えることである。

### 3. 日本腎臓学会と国際学会

日本腎臓学会は昭和 34 年（1959 年）に、大島研三、吉利 和、浅野誠一、上田 泰らによって設立された。さらに、日本腎臓学会誌は Japanese Journal of Renology とされていたが、翌年には Japanese Journal of Nephrology に改称されている。大島らの発案になるようであるが、まだそ



の頃 Nephrology という言葉が英語でも存在しなかったことを知るべきであろう。事実、国際腎臓学会 International Society of Nephrology が設立されたのは 1960 年であり、大島は副理事長 Vice President に就任している。さらに、今や、世界をリードする米国腎臓学会 American Society of Nephrology も 1969 年に創設されている。このような歴史を踏まえても、日本での腎臓学会は世界でも類を見ない先進性と、国際性を備えていた。これもひとえに先人達の高い見識の故である。その後は、1990 年に国際腎臓学会を東京で大島研三会長の元に開催され、日本の腎臓学は世界的に認知されてきたのである。ここで、歴史的経過からもっと早くから日本での開催が予定されていたが、第 2 世界大戦での日本への反感等が国際学会の理事の一部にあつたのでこれまでの年月を要したと聞いて聞いている。この国際学会は東京で開催され大成功をおさめた。国際腎臓学会では重松秀一（病理）、黒川清、堺 秀人らが理事を勤め、これらの実績を踏まえて、私がアジア人としては初めて 1997-1999 の 2 年間、理事長 President of the International Society of Nephrology を勤めさせていただくまでになった。佐々木 成がその Official Journal の Associate Editor として活躍している。

一方で、アジアとの交流のさかんに行われており、Asian Colloquium of Nephrology、Asian Pacific Society of Nephrology 等に日本の内科学、病理学、生理学者を広く含んだ腎臓学者が参加し、大いに活躍している。これからの日本は地政学的にもっとアジアの重要性を認識すべきであり、腎臓学においてはその実績があるとは言え、もっと積極的に参加、関わっていくべきであろう。多くの若手に期待したい。

#### 4. この 50 年の腎臓学での日本人とこれからの日本

本特集で各論についてはいくつも記述があるのであまり述べないが、透析療法の発展と貢献は臨床腎臓学に大きな貢献と影響を与えた。慢性末期腎不全にたいする透析療法は画期的なものであったと言えよう。日本の透析医療は世界でも最も質の良い医療を提供している。その一因として患者負担の極めて少ない医療制度が預かっている。一方で、腎臓の移植はのび悩んでいる。日本人の死生観を含めたいくつもの問題と課題がある。

日本人研究者の貢献は国際的に広く認められている。腎臓生理学では、星 猛、今井 正等は世界のどこでも通用する名前である。これらの研究室から多くの俊英が排出された。そして今の 30-50 歳代の腎臓学に関わるものたちは、多くが米国での研究歴を有し、米国腎臓学会でも、日本からの演題が海外からとしては最も多くなっている現状である。日本も豊かになり、若手にハングリー精神の少なくなってきたこのごろ、米国の学会へいっても中国をはじめとする多くのアジアの若手の台頭が著しい。この特集が将来をになう人材へどのようなメッセージとなるのであろうか。国際時代への「温故知新」の重要性をのべた。（本論文中の敬称は略した）

#### 文献

1. 黒川 清：日内会誌 90：1620-1632、2001.
2. 阿部 裕、上田尚彦：腎臓学、20 世紀の回顧と 21 世紀への展望。日本臨床 58：=1527-1533、2000.
3. 黒川 清：今井 正、飯野靖彦、内田俊也：日本腎臓学会雑誌：1-17、2002.